

人口減少時代を迎えた局面での大学教育



巻頭言

森井 英一*

Education of University in Era of Population Decline

Key Words : Education, Scrap & Build, PDCA cycle, Effort

人口爆発時代を経て、いまや日本人の人口は急激に減少する局面に入った。右肩上がりとは右肩下がりでは全く印象が異なる。イケイケドンドンで拡大路線に従って進んでいたものが縮小を余儀なくされ、元気も無くなりジリ貧になっていく。18歳人口が右肩下がりの世の中で、当然大学も縮小路線を余儀なくされる時代である。2019年6月18日に文部科学省から発出された国立大学改革方針では、国立大学の適正な規模という文言が記載されている。ほぼ同時期の6月21日に閣議決定された「経済財政運営と改革の基本方針2019」でも大学改革として大学の連携・統合が明記された。これをピンチと捉えるのではなくチャンスと捉えると、「元気も無くなりジリ貧になっていく」ことが回避できるかもしれない。

大学教育というものはマンネリの極みである印象が世間では持たれている。毎年同じ講義が行われ、似たような試験、成績評価の結果、似たような人材が育成される。大学の責務の一つとして研究を進め、高い研究業績を出すことが求められる中、教育にまでなかなか手が回らないということがある。医学部の、特に臨床系の教員は診療も附属病院で行なっていることから、より教育にエフォートを割くことが困難であるという現状もある。一方、スクラップアンドビルドという言葉がよく使われる。組織は常に

リニューアルが必要で、マンネリになった組織は衰退していく。これを避けるために既存の枠組みを変革していくことで組織を強靱化する。そのため、既存の枠組みを壊して(スクラップ)、新たな枠組みを構築する(ビルド)という概念である。18歳人口の減少という外圧により、マンネリの極みと考えられている大学教育をスクラップアンドビルドするいいチャンスであるかもしれない。

国家資格である医師、歯科医師、薬剤師、臨床検査技師、看護師、放射線技師の養成では教育のやり方がある程度定められている。そのため、これに従って教育を行わないといけないという縛りがあり、国家試験を受けさせる人材の教育はリニューアルをやるににくい分野である。ところが、こと医師を養成する医学教育では、最近「国際認証」という外圧がかかり、カリキュラムをどんどんリニューアルしていくことが求められている。それこそ、スクラップアンドビルドを常に行うことが「国際認証」を得るための必要条件となっている。このため、医学部ではカリキュラム委員会とプログラム評価委員会というものを新たに作り、いわゆるPDCAサイクルをぐるぐる回すことで教育システムを常にリニューアルすることとなった。この委員会には各学年の学年代表も加わっている。学生さんが委員会に出席して意見を言うということが最初は見慣れない風景に映ったが、実際に委員会を開催してみれば、学生の視点から様々な建設的な意見が出て、なかなか有意義な委員会をもつことができた。

さて、大阪大学全体で教育をスクラップアンドビルドすると考えた時、ビルドすべき教育、つまり大阪大学ならではの教育はどのようなものだろうか。大阪大学は帝国大学としては唯一、民間のみの力で設立された大学である。民間が必要とする人材を育成する教育機関として民間から渴望されて設



* eiichi MORII

1964年4月生まれ
大阪大学大学院 医学研究科 (1996年)
現在、大阪大学大学院 医学系研究科
病態病理学・病理診断科 教授 医学系
研究科長 医学博士
TEL : 06-6879-3711
FAX : 06-6879-3719
E-mail : morii@molpath.med.osaka-u.ac.jp

立された経緯をもつ。この際、原点に立ち戻って、社会から何が大阪大学の育成する人材に求められるのか意見を聞き、ビルドすべき教育を冷静に議論する時かもしれない。幸い、大阪大学は学部間の垣根が比較的低いという特徴をもつ。特に生命医学系の学部は互いに交流も盛んで、大学院教育においては共通した教育プログラムを卓越大学院プログラムとして運用している。この卓越大学院プログラムにおいては、企業人も教育に直接参加してもらい、企業が求める人材を育成する試みも実行している。プログラム説明会には企業からも参加いただき、どのような人材を求め、そのためにどのような教育プログラムを運用するのかご説明いただいている。学生側からすればキャリアパスの明確なプログラムであり、最初の入学選抜では2倍以上の倍率でいい人材に参加いただけたと考えている。このような学部の垣根を越えた柔軟な教育プログラムを、大学院のみならず学部レベルの教育でも運用することも可能かもしれない。学生さんが自らの能力を花開かせるために必要な教育を自由に構築することができるような仕組みを入れることも面白いかもしれない。ただし、

このような教育の改革を行なった時にいつも問題になるのは、教員の教育負担が増加する点である。エフォートを教育にとられることで、大学に求められる研究水準を維持できるのかという議論が常にある。この点を解決しない限りは、大学教育はいつまでも現状維持、つまりマンネリなことが繰り返されることになる。現在、単位は時間でカウントされる。例えば講義は15コマで2単位とカウントされるといったことである。この際、時間による単位設定をやめて、アウトカムの評価で単位を設定するように変革することを文部科学省に認めてもらうのもいいかもしれない。授業にかけた時間ではなく、ある一定の教育成果が得られたことを厳格に評価して単位を認定することになれば、より効率的な教育が行える。現在、働き方改革においては就業時間ばかり議論されるが、実は時間ではなく仕事の密度、つまりアウトカム重視の働き方を評価する方がいいのではないかと同様に同様のことは明らかであろう。

